六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

増田セバスチャン アートディレクター / アーティスト

Sebastian Masuda / Art Director / Artist

CREATOR INTERVIEW No 97

増田セバスチャン　Sebastian Masuda

1970年生まれ。演劇・現代美術の世界で活動した後、1995年にショップ「6%DOKIDOKI」を原宿にオープン。きゃりーぱみゅぱみゅ『PONPONPON』MV美術、「KAWAII MONSTE CAFE」のプロデュースなど、原宿のＫａwａｉi文化をコンテクストに作品を制作。2014年よりニューヨークを中心に個展を開催。2020年に向けたアートプロジェクト「TIME AFTER TIME CAPSULE」を世界10都市で展開中。2017年度文化庁文化交流使に選出。現在、箱根のポーラ美術館で自身による大型インスタレーション作品、『Point-Rhythm World 2018 -モネの小宇宙-』を展示中。（～2018年12月2日まで）

NO 97

増田セバスチャン アートディレクター / アーティスト

SEBASTIAN MASUDA / Art Director / Artist

クリエイターインタビュー

『Kawaiiとはモノではなく、概念であること』

なぜKawaiiが日本のポップカルチャーとして世界に認知されたのか。
それを紐解く展覧会をやってみたい。

published_2018.9.26 / photo_yoshikuni nakagawa / text_nanae mizushima

原宿のカワイイは、世界の Kawaii へ。21 世紀に入ってから世界でもっとも広まった日本語かもしれない Kawaii。その言葉にパワーを持たせたのは、アートディレクター / アーティストとして国内外で活躍する増田セバスチャンさんです。アートとファッション、エンターテイメントなど、様々な領域を横断しながら、Kawaii カルチャーを発信し続ける増田さんに、そのクリエイションの原点や活動を振り返っていただき、六本木と Kawaii の可能性についてうかがいました。

" カワイイ " の、その先にあるもの。

僕の表現の原点と言えば、大好きだったハードコアパンクやノイズなど、いわゆるインダストリアル・ミュージックと、20 歳くらいの時にお手伝いさせていただいていた現代美術家の存在が大きいです。当時はとにかく過激な表現で知られる方で、時代に切り込むようなコンセプトでトンがった作品をつくられていました。

そもそもそれがアートなのか、演劇なのか。当時の僕は若かったから、それもよくわからずに、ただ純粋に、その世界に惹きこまれて手伝いをしていましたが、結果として自分の表現を突き詰めていく、良いきっかけを与えてもらいました。

© Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

自分にとっての過激なもの、狂気って何だろう？ そう問い続けるうちに、あるとき子どもやキティちゃんの存在が浮かびました。どちらも無条件にカワイイじゃないですか。けれど例えば子どもは虫を残酷に扱ってしまう瞬間がある。砂場で遊んでいて蟻を見つけたら、つぶしてしまったり。キティちゃんはキティちゃんで、実は口がなかったりして、逆に過激にも感じられます。つまり、僕にとっての過激な存在、狂気とは " カワイイ " の、その先にあるものではないか。そう思ったんです。

受け入れてもらえなかった自分のアート。

それで僕は 22 歳頃に自分のパフォーマンス集団を結成して、カワイイと狂気が同居する舞台を公演しました。自分としては今と何も変わらない表現をしていたつもりですが、アートや演劇界隈の方から結構批判されたんです。

批判の背景には時代の空気もあったかもしれません。90 年代初頭は、モード全盛期。そんななか、カラフルな色彩で子どもの狂気のようなものを表現した作品は、受け入れてもらえませんでした。

僕の中のカラフルな色彩の原風景は、生まれ育った街の商店街にあります。子どもの頃、学校が終わって家に帰ると、いつもお腹が空いていました。でもうちは呉服屋だったこともあって、夕食の時間が遅かったから、僕は親に 100 円だけ持たされて、商店街にある駄菓子屋やおもちゃ屋に立ち寄るのが日課でした。

時代は昭和。あの当時のお菓子やおもちゃのパッケージって、すごくカラフルですよね。その色彩が、今も脳裏に焼きついていて、ワクワクする。そしてあの頃抱いていた未来に対する大きな期待、キラキラしている風景が未だ忘れられないし、それを今また多くの人と共有したい。そういう気持ちから僕の作品の色彩は、生まれていると思います。

カワイイは、歴史のある日本のオリジナルのもの。

アートや演劇の世界で僕の表現が受け入れてもらえない。そのジレンマの解決策として、1995 年に僕が原宿で始めたのが、「6% DOKIDOKI」という自己表現の場であり、ショップでした。なぜショップだったのか。それは開催期間がどうしても限られてしまうアートや演劇とは違って、たくさんの人に見てもらえて、わかりやすく評価してもらえる場所になると思ったから。また場所を原宿にしたのは、自分が 10 代の頃、毎週のように通っていた場所だったことと、何でも受け入れてくれる自由な空気が大好きだったからです。

やがてこの「6%DOKIDOKI」を含む 90 年代の原宿から発信されるモノやコトが後の " 原宿 kawaii 文化 " を生み、そしてそれが海外へも波及していくなかで、僕自身の表現がファッションやエンターテインメントの世界で受け入れてもらえるようになりました。ここに至るまでに約 20 年、かかっているんです。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

「6%DOKIDOKI」

1995 年、増田セバスチャンが表現の場として原宿にオープンしたショップ / ブランド。通称ロクパー。可愛すぎるモノやコトを意味する「センセーショナル・ラブリー」というコンセプトのもと、オリジナル商品やセレクト、企画を展開し、ジャパニーズ・ポップ・カルチャー最前線を提案し続けている。6%DOKIDOKI の常連だったきゃりーぱみゅぱみゅのアーティストデビュー時の MV 美術やライブの演出・美術を、増田が担当した。実店舗のほかに国内・海外オンラインショップを展開中。
http://dokidoki6.com

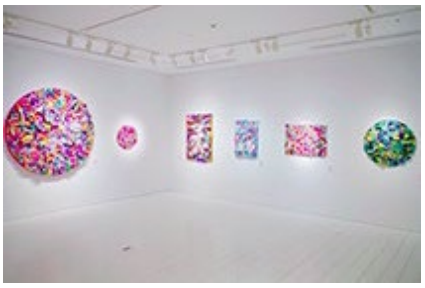
" 原宿 kawaii 文化 " が世界に認知され、僕自身の声もまた、社会に届きやすくなったことで、過去に認められなかった自分のアートに立ち帰れる環境が今やっと整いつつあります。そういったなかで六本木は、世界各国の大使館が集う場所ですし、東京で自分のアートをプレゼンする場としては、最適な街だと思っています。

実際、六本木には縁があって、2013 年には六本木ヒルズの展望台に飾る大型のクリスマスツリーを製作しましたし、昨年は六本木ヒルズ A/D ギャラリーで個展『YOUR COLORS』を開催し、六本木ヒルズ森アーツセンターギャラリーで開催された『THE ドラえもん展 TOKYO 2017』に作品を出展しました。それぞれ求められるテーマは違いますが、その根底は一貫していて Kawaii をコンテクストに、僕は作品を制作しています。

そもそも僕にとって Kawaii とは、本質的には物質ではなく思想を指すものです。それはとてもエモーショナルなものであり、言語化するなら、自分の中に小宇宙をつくること。そして、現代のカワイイは、原宿から突然に現れたものでなく、歴史のある日本のオリジナルのものであると思っているんです。それを多くの人に実感してもらいたい。だから今、僕は歴史からカワイイを紐解くことに取り組み始めています。

例えば古くから受け継がれてきた日本の文化に「侘び・寂び」がありますが、僕自身はこの「侘び・寂び」よりも、今は「ハレ」を、改めて見つめるべきなんじゃないかと思っているんです。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.



『YOUR COLORS』

世の中に存在する色（マテリアル）を集結させて再構成する Colorful Rebellion シリーズ、アートプロジェクト「TIME AFTER TIME CAPSULE」など、近年の増田の代表作を展示した作品展、『YOUR COLORS』。展示期間中は併設される六本木ヒルズ アート&デザインストアでオリジナルアートグッズ「Sebastian Masuda ART」を販売した。日時：2017 年 10 月 20 日（金）〜11 月 12 日（日）　会場：六本木ヒルズ A/D ギャラリー

『THE ドラえもん展 TOKYO 2017』

2002 年〜 2006 年に全国 13 会場を巡回した、『THE ドラえもん展』の続編となる企画展。日本を代表するアーティスト 28 組 30 人がそれぞれ " 世界にひとつだけのドラえもん " を制作。増田は、1 万個以上のパーツを使用して 3 メートルの巨大なドラえもん、『さいごのウエポン』を制作し、会場エントランスに展示された。現在、全国各地を巡回中。詳細は HP をチェック。日時：2017 年 11 月 1 日（水）〜2018 年 1 月 8 日（月）
会場：森アーツセンターギャラリー
http://thedoraemontentokyo2017.jp

© Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2018.9.26 / photo_yoshikuni nakagawa / text_nanae mizushima

置き去りにされた「ハレ」を取り戻す。

ハレと言えば、昔の人々はお祭りや伝統行事を行う特別な日をハレと呼んで、豪華絢爛、縁起のよい動植物や文様などを衣装や飾り物として用いて、晴れ舞台を楽しみました。歌舞伎観劇もまたハレの行事。ハレは大正時代まで日本の文化として根づいていました。

ところがその後の第二次世界大戦によって、日本の多くの文化がリセットされてしまいました。リセットされてもう一度作り上げていく。そのなかでハレはどんどん置き去りにされ、侘び・寂びが日本の心、文化としてフィーチャーされて受け継がれてきたように思います。

ですが、この置き去りにされてしまった「ハレ」こそ、僕は人をポジティブな方向へ導く大切な何かがあると思っています。そしてカワイイは、まさに「ハレ」という文化と確実にコネクトしている。それをもっと歴史を紐解きながら、検証していきたいんです。震災や災害に多く見舞われ、困難の続く日本に、少しでもポジティブになれる力を、カワイイから発信していきたい。

なので、カワイイのルーツを知り、なぜ今このカワイイが日本の新しい概念として世界にもてはやされているのか。それをちゃんとプレゼンする展覧会を、やってみたいと思っています。それも六本木でできたらいいですね。なぜなら六本木は、大使館や外資系企業が多く、日本のアートに対する人々の感度も高い。よってより多くの外国人の方に、世界へ波及しているKawaii を伝えることができるからです。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

環境を打ち破るための "Kawaii"

"Kawaii" は、今や日本のポップ・カルチャーを形容する言葉として、世界各国で定着してきています。僕の肌感では、アメリカでは西海岸からそのムーヴメントが拡大しました。シンガーソングライター、ケイティー・ペリーの代表曲「カリフォルニア・ガールズ」の MV にもあるような、土地に根付いているポップでクレイジーな色彩感覚との相性が良く、感度の高い女の子たちが日本のファッションをミックスしたスタイルを広げて行ったのです。対する東海岸は、西海岸よりも人種や宗教、性別などに対して差別的な視線を受けやすい土地柄ということもあって、Kawaii を、自分の置かれた環境を打ち破るための手段に用いている人が多いように思いました。そもそも Kawaii とは、見た目、形を指すものではなく、哲学であり概念 ..... という意味では、東海岸の方が Kawaii の本質が急速に伝わっているように感じます。

ケイティー・ペリー

1984 年アメリカ・カリフォルニア州生まれ。5 歳の時にクイーンの『キラー・クイーン』を聞いて感銘を受け、音楽の道に進むことを決意。2007 年 4 月、メジャー・デビュー。2013 年 10 月にアルバム『プリズム』を発売。米ビルボードチャートシングルチャートで見事 1 位に輝いた。Kawaii に精通する原色を多く使った個性的な着こなしが目立ち、ファッション界からも一目置かれている。大の親日家。日本生まれのキャラクター、ハローキティのタトゥーも入れている。

ニューヨークと言えば、僕は今、ニューヨーク大学の客員研究員を務めているんです。研究テーマは、アメリカのユースカルチャーと日本人アーティスト（芸術家）、そしてその関係性にどう今の Kawaii が結びついていくのか、といったことです。

というのも 1960 年代から 70 年代に活躍した日本人アーティストが、当時のアメリカのユースカルチャー、特にクラブシーンに影響を残しているんです。そしてその影響が今、Kawaii がアメリカで熱心に受け入れられている理由につながっているはず。それをちゃんと文脈立てて説明できるのではないかと思っていて、当時の歴史を辿りながら研究をしているんです。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

ここから 10 年、ニューヨークを入口に世界で戦い抜きたい。

来年から僕はニューヨークに半分、活動拠点を移す予定でいます。今、ちょうど向こうでスタジオを探している最中で。そう決断した理由はいくつかあるんですが、まず一番は、日本でアート活動をしようとすると、どうしてもスケールが小さくなってしまう傾向にあるから、それを避けたかったということ。予算の問題、相手の要望など、いろんな課題が出てきて、結果的に作品のスケールに関わってくるのがどうしても抵抗がありました。自分で考えたものをそのまま膨らませたい。作品のスケールを保ちたい。その想いが強くなって来て、海外に創作の場を移そうと決めたんです。

じゃあなぜニューヨークだったのか。それは年齢的なことがあります。今、僕は48歳。アーティストとしてフレッシュな状態、精神的にも体力的にも無理がきく状態というのは、自分の年齢的にもあと 10 年かなって。じゃあその 10 年間をどこを中心にして戦うのか。それだったら嫌いな（笑）、ニューヨークだと思いました。

ニューヨーク、旅行で行くぶんには楽しくて刺激的で好きな街です。でも住んでみると、ボクシングでいうところのリングみたいな感じで、全世界から集まって来た強者たちと無差別級で戦わせられるような街なんです。だから傷つくことも多いし、ダメージも大きい。だからこそ、アーティストとしては戦いがいがあると思ったんです。

© Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

増田セバスチャン アートディレクター / アーティスト
SEBASTIAN MASUDA / Art Director / Artist

published_2018.9.26 / photo_yoshikuni nakagawa / text_nanae mizushima

オランダの開拓精神とインフラ整備が熱い。

もしも住むだけなら、オランダのアムステルダムに住みたいです。昨年、文化庁文化交流使に任命されて、3 か月ほど住んでいたんですが、アムステルダムはカルチャー全体がおもしろいですし、何より人々の物事に対する価値観が好き。

基本的にオランダの人は開拓精神が根づいています。ニューヨークさえもオランダ植民地時代があって、その時代はニューアムステルダムという名称で呼ばれていましたから。その精神というか、外へと切り開いていこうとする意識がオランダの人から感じるんです。

開拓精神とはちょっとずれてしまうかもですが、オランダはインフラ立国でもあります。例えば食物の施設栽培。食料の生産地から食卓までの輸送距離が長いほど環境への負荷が大きくなっていきますが、その負担を減らすひとつの方法として、オランダでは農業用地のない大都会の廃墟ビルで野菜や魚を育てて、それを地域の人たちに供給するユニークな試みが行われているんです。これもおもしろい。

ほかにもオランダを代表するインフラと言えば、風車。オランダでは風車は海水を排出する動力として長く活用されてきましたが、他の技術が発展していた今でも 5 年かけて風車をつくり続けている。その国民性が僕にはすごく楽しい。そんな風車ですが、完成したらパンをつくるための小麦を粉にするときに活用されているんです。「え?」って思うでしょう（笑）。このインフラ整備に対するオランダの人たちの価値観が、僕は好きです。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

アートは言葉をビジュアル化する。

文化交流使だった頃、僕はアムステルダムの街じゅうの元造船所だったところにアトリエを構えて、そこで約 2 か月間、作品制作をしました。テーマは、「アノニマス（匿名・無個性）からの脱出」。小さな紙にラフスケッチを描いて、見知らぬ人に「これおもしろいからやりましょうよ」って言ってまわって、それでどれだけのことができるかっていうのを試みました。

この作品を思いついたのは、当時、自分が迷っていたからです。2014 年にニューヨークで個展を開いて、アーティストとしてデビューしたあとというのは、作品にいくらの価値がついた、いくらで売れたとか、そういう商売の話になってきて、いつしか自分が高級インテリア職人のように思えてきたんです。

「アノニマス（匿名・無個性）からの脱出」

2017 年 11 月 18 日、「アノニマス（匿名・無個性）からの脱出」をテーマに、野外公演『ESCAPE FROM ANONYMOUS(E) -Improv Orchestra for the World-』を発表。ネズミのマスクを被った俳優陣、ストーリーに合わせて楽曲を奏でるミュージシャン、カラフルな衣装のパフォーマー、白い覆面を着用した観客と全員で、ひとつの作品を作り出した。

アーティストとは本来、作品を通してメッセージを投げかけていく存在ではないのか？ そのジレンマを抱えながら、自分はアートを通じて一体何をしていくのかを、改めてこの作品を通して問い直そうとしました。

そしてこの作品では、沈む船からはネズミがいなくなる。つまり沈没をいち早く察して逃げる習性があるネズミとヨーロッパの社会情勢を重ね合せたんです。それをひとりひとりに説明していったら、最終的にはスタッフだけで 100 人、お客さんは 1,000 人も集まって、すごく大きなパフォーマンス公演ができて。Kawaii はローカルなものとミックスされて膨らんでいくものですが、このとき見事にアムステルダムの文化とミックスされながら、ここでしか出せない Kawaii が膨らんでいきました。

そこで僕は再確認できたんです。アートには人を巻き込んで何かを生み出すパワーがある。やっぱり僕はそのパワーを信じてアートをやっていきたいと。もしそのことが実感できなければ、高級インテリア職人の道を突き進んでいこうと思っていましたから（笑）。

アートは言葉をビジュアル化できるものです。僕はこれから 10 年かけて、自分が伝えたいメッセージをビジュアル化していきたいと思います。その最終的なアウトプットを東京で見せられるかはまだわかりませんが ..... その機会があれば、ぜひ六本木でやってみたいですね。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

取材を終えて .....

例えば洋服、アクセサリー、インテリア、雑貨、男女問わず好きな人。「素敵だ！」と思ったものは、大抵「カワイイ！」という言葉に変換して、私はこの世界に感情を放り投げていました。よってあまりにも身近な存在だった「カワイイ」ですが、こうして増田さんの活動に触れることで、新しい視点で変化に富んだカワイイを、自分のなかに獲得できた気がします。そしてそれはモノではなく、概念。アートの力は果てしないとあらためて実感しました。いつの日かまた、ニューヨーク大学での研究成果をうかがってみたいです。（text_nanae_mizushima）

© Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.